

Aさんのこれからの暮らしを考える 大人の階段のぼる計画 ～「感動〇〇！」あふれる生活を目指して～

津久井やまゆり園 地域サービス課
宮田 かずみ
中島 健太

1.はじめに

外部コンサルティング等地域資源の活用と連携、支援の建て直し、チーム支援の重要性など支援を通して、津久井やまゆり園芹が谷園舎(横浜市)にて取り組んできたAさんと支援者の成長と変容について報告する。

2. 事例概要

(1) 生育歴等

① 児童期

他者へタッチ、車などへの興味、小・中学校は普通級へ進学(特学がなかった為)。

② 中学生の頃

思い通りにならない場面で怒る、噛みつくことなどみられた。中2より特学が出来て転校。

③ 成人期

卒業後は在宅生活を送りながら通所施設を利用。電車に乗って色々なところへ行くようになり、主に中央線や南武線の発車ベルが好きで録音しに行っていた。在宅生活の間は、家でテレビを観たり音楽を楽しんでいた。

家庭環境の変化、職員の異動などから衝動的な行動が目立つようになり、平成17年(36歳)より秦野精華園入所。その後、生活も落ち着いてきたが、平成20年の施設体制の変化から、こだわりの表出がエスカレートし、他利用者・職員の服脱がし、他者へのタッチなど支援困難な状態となる。その後も物品へのこだわり、他者の衣類を噛みちぎるなどこだわりの多様化、強化は支援の枠を超えていき、3か月の医療保護入院も経験した。

④ 43歳以降

平成24年2月～津久井やまゆり園入所。現在に至る。

(2) 好きなこと

① 物品

『可愛いもの、小さいもの、ポスターなど飾り』
『ゲーム機、雑誌、CD、DVD』

② 食べ物

『マクドナルド、ラーメン、ピザ、ポテチ…』

③ テレビ

『24時間TV、番組Tシャツも欲しい』
『ジャニーズアイドルの番組』『TVCM』

④ 活動

『ラジカセでTVの録音』『歌をうたう』
『お話し好き、想いを言葉で伝える』
『お絵描き(人の顔を描く)』
『電車の話、発車ベルのメロディー』

(3) 課題

他者へのタッチ、手を舐める、服を破るなど、気になりはじめると想いを制止することが難しく、無理に止めようとすると、大声、噛みつく、叩くなど、より激しい行動がみられる。また、代替行動も見つかっていない状況。

3. 本人の希望する生活の実現に向けての取り組み

本人の希望する生活実現のため、意思決定支援会議や園内カンファレンス等を定期的開催し、支援の検討を重ねてきた。意思決定支援とは、神奈川県による津久井やまゆり園再生基本構想に基づき、津久井やまゆり園の利用者一人ひとりがその人らしく生活できる環境を提供することであり、今後の生活の場も含めた選択について、一人ひとりの意思を尊重しその実現に向け丁寧かつ適切な手続きにより、利用者の意思決定支援に取り組んでいる。これからのことを本人自身が決め、希望する生活を実現することを目指し、意思決定

支援を本人や家族を含めた関係者でチームを組み、検討が重ねられている。

どうしたらAさんの望む生活に近づけることができるのか。生活の幅を広げる取り組みとして、過去の様子や支援を振り返りながら、本人の特性について整理し、わかりやすい情報提供・視覚的な支援の提供などチームメンバーで検討を続けてきた。しかし、支援を広げることで衝動を抑えることができず、施設という集団生活において、他者とのトラブルが増えていった。

4. これまでの支援

(1) 生活寮での支援

① コミュニケーション

言葉でのやりとりをご本人の強みと捉え会話中心の関わり。

② 課題となる行動に対して

舐めなかったら好きな写真を得ることが出来る。「いけないことはいけない」としっかり伝える。

③ 環境整備

居室で楽しめる物品用意(TV・ラジカセ・ゲーム機など)。カレンダー・予定表・約束事提示。

④ 要望書

支援者によって対応のばらつきがでないように、希望や要望は紙に書いて提示。

(2) 日中活動での支援

① コミュニケーション

言葉のやりとりは理解力が乏しい。会話は遊び程度にする。気になることの確認などは文字。

② 課題となる行動に対して

注意や叱責は行わない。環境を変化させない。適切な行動には積極的に応える。

③ 環境整備

活動時間延長のため休憩室を用意(テレビ・DVDデッキなど用意)。予定表提示。

④ ポイントカード

作業が出来たらポイント獲得。ポイントをためて外出、ジュースなどを得ることが出来る。

(3) その他の支援

寮では対応困難なことが多く、気分転換にドライブに出ても、ドライブ中にマクドナルドの要求が強く、大声や車内で暴れるなどして結果希望が叶えられる場面が見られた。物品の要求や、こだわりが断ち切れないなど支援困難となり、日中活動の過ごしのお昼も含み、9:00~17:45まで延長、年末年始やGWなどの長期休みには日中活動を稼働などの対応を取るようになった。

(4) バラバラな支援

生活寮も日中活動でも試行錯誤しながら支援を続け、カンファレンスなどを開催するものの、本人の捉え方も、支援方法についても生活寮と日中活動ではバラバラであった。

日中活動場面では、ある程度の枠の中で過ごすことが出来ていた。ただそれは、現在の特殊な環境に無理やり合わせているだけで、この先の生活のイメージといったものは想像が出来ない状況であった。

生活寮では、本人のこだわりの行動(他者へタッチ・握手・舐める・他者の部屋に入る・他者のものを壊す…)はおさまらず、希望が叶うと次々と要求がエスカレートし、希望が通らないと大声、力づくで他者へ向かう、叩く、蹴る、噛みつく、物を投げる等、激しい行動に繋がっていった。

5. 支援者の葛藤と疲弊、 コンサルテーションの導入と内容

(1) 支援者の葛藤と疲弊

本人の要求がエスカレートし、社会的に良くない行動も自分では抑えることができず、本当は「やりたくない」のに我慢できないという苦しい状況が続いた。支援者は、対応が困難で『困った人』という認識が強くなり、Aさんに対する支援の限界(行き詰まり)を感じていた。

(2) コンサルテーションの導入

2020年6月、生活の幅を広げる取り組みを進めるために支援のアドバイスを求め、横浜市発達障害者支援センターへ相談し、コンサルテーションを依頼したことで「転換期」を迎えることとなった。相談した時点でのセンターの見立てとして、「支援者が本人を過大評価、発達からくる生きづらさ

令和3年度 体験交流セミナー④

を抱えている事の理解が不十分である」と指摘され、これまで悪循環となっていた支援を改めなければならないことがわかった。

支援を変えることについて「こんな大変なこと本当にできるのか」と大きな不安があったが、「Aさんの可能性を信じてチャレンジしよう！」という決意をもって、コンサルテーションを導入した。

(3) 自閉症及び本人理解を深めるための研修
2020年9月～11月の間に、自閉症支援の基礎研修5回実施。

- ①自閉症の基礎
- ②アセスメント
- ③TTAP検査の振り返り
- ④構造化
- ⑤応用行動分析を1セッション2時間の研修を行ない、ベースとなる知識を身につけた。

また、専門的な見立てとして発達障害者支援センターによる本人のアセスメント(TTAP検査)を実施している。

(4) アセスメント結果より見えてきたこと

TTAP検査を実施し、そこから見えてきた本人像は、「視覚的なものの理解に優れている」「言語よりも視覚的な情報から理解している」「話し言葉がある為に過大評価されがちだが、他者に困り感を伝えることが苦手ゆえに不適切な行動として表出していた」ということがわかった。

これまでの「困った」と言われていた行動の背景に、時間・予定・コミュニケーションなど「目に見えない」ものへの理解の難しさがあったことが明らかとなった。

(5) チームの共通認識

それぞれの価値観や認識で支援を行なってきたが、支援者が研修を受講し、また改めて本人のアセスメントをとることで本人理解を深めることが出来た。

困っているのは支援者ではなくAさん本人であること、障害特性に合わせた支援が必要であることをチーム内で共通認識を持ち、支援を一新するために準備を開始した。

6. 新しい支援

(1) スケジュール

(目で見えて先の予定がわかる仕組み)

【これまでのスケジュール】

おたのしみかつどう 12月18日(金)のよていひょう	
9:30	体育館で映画会
11:00	きゅうけい
11:45	おひるごはん
13:30	体育館で映画会
14:15	しちようかくしつでけんとうかいぎ
15:00	きゅうけい
16:00	おやつ
16:30	うんどうの時間 ふつきん20回
17:35	りょうにかえります



【新しいスケジュール】



スケジュール支援について、決して支援者が都合よく本人を動かす為ではない。いい意味で本人は、人を頼りに出来る人。悪い意味では、人の動きによって自分の動きを判断しているので、対

令和3年度 体験交流セミナー④

応にばらつきが生まれやすい。人によって対応がばらつくと、人の反応を見るために不適切な行動をするようになり、悪循環になってしまう。曖昧な存在である「人」にではなく、目に見える物を頼りに、自立した生活が出来るようにするためのシステムである。

(2) ワークシステム

(活動内容を分かりやすくする仕組み)

【日中活動】



【生活課:本人居室内】



人の手を借りず、自立した活動が出来るように、「何を どのくらい」「どうなったら終わりか」「終わったら次はなにをするのか」と言ったことを本人に理解しやすくする仕組みである。

(3) 自立課題

人の援助や指示を受けることなく、自分で始めて、自分一人の力で終わらせることのできる活動。自信と自己肯定感につながる。



(4) 手順書

(関り方を統一した支援)

支援者によってばらつきが出ないように、また、書面化することは、支援の振り返り、改善をしていく助けとなる。

【休日PM】 支援手順書／記録用紙

付:	氏名:	種	
時間(目安)	活動	本人の動き	支援者の動き
12:40頃	休憩 準備 休憩 トイレ	①「休憩」カードを取り休憩室へ「休憩」カードをマッチング ②トランジションカードを取りマッチング ③「高機能・トイレ」カードを取りトイレの洗面台へ移動 ④「高機能・トイレ」カードをマッチング ⑤高機能トイレを待機 ⑥高機能トイレを待機 ⑦トイレにて排便 ⑧排便後、トランジションカードを取り休憩室へ移動室にてマッチング	【事前準備】 - 高機能セット、トランジションカードをセット ①②③④⑤⑥⑦⑧ ⑧トイレ清掃準備
12:50頃	休憩 自立課題	①「高機能」(自立課題)カードをマッチング、高機能ワークシステムに就いて自立課題を行う ②高機能ワークシステムで作業 ③高機能ワークシステムで作業 ④高機能ワークシステムで作業 ⑤高機能ワークシステムで作業 ⑥高機能ワークシステムで作業 ⑦高機能ワークシステムで作業 ⑧高機能ワークシステムで作業	【事前準備】 高機能ワークシステムのカード製作、トランジションカードをセット、高機能ワークシステムの写真を準備 ①②③④⑤⑥⑦⑧ ⑧本人作業室へ移動後、写真を撮り自立課題終了
14:20頃	休憩 トイレ	①「トイレ」カードを取り、トイレへ移動 ②「トイレ」カードをマッチング ③トランジションカードを取り、洗面台へ移動 ④トランジションカードをマッチング	【事前準備】 トランジションカードをセット ①②③④⑤⑥⑦⑧

① 統一した対応

- ア、本人の情緒を乱す元となる過剰な刺激は整理する(会話、テレビ、CD、ゲームなどテレビを観てあれが欲しい、あのCMが見たいなど不安のもとになるため)。
- イ、支援者は言葉のやりとりはせず、今何をすべきかをスケジュールの方に注目してもらう。

令和3年度 体験交流セミナー④

ウ、本人からの言葉には否定せずに傾聴し、要望などには復唱し、淡々と今やるべきことに戻ってもらう対応をとる。

エ、支援者は本人がスケジュールに注目しているよう黒子のようにサポートすることに徹する。

7. 新しい支援の開始

(1) ソーシャルストーリーブックで本人説明

新しい支援開始の朝、ソーシャルストーリーブックをもとに本人にこれからの生活について説明(セレモニー)し、支援が開始された。ソーシャルストーリーとは、本人に理解のしやすいイラストや文字を使うことで、目に見えないルールや人との関係、社会的なルールを学ぶ助けにするためのツールである。自発的に適切な行動を選択しているように、状況に応じた求められる行動、考え方などをストーリーに沿って説明している。

【ソーシャルストーリーブックの一部】



【セレモニーの様子】



(2) 新しい支援開始

新しい支援は生活寮を出てセレモニーを実施し、日中活動場からスタートした。日中活動へ参加している間に、生活寮の居室をリニューアル。居室も活動との場所が、1対1の整理された環境となった。

【本人の居室】



【日中活動】



(3) 支援は随時見直す

システムは随時見直しを行っている。躓いている場面については、環境の工夫をした。

- ① カードが入れにくい
⇒ カードポケットを大きく
- ② スケジュールの注目が低い
⇒ 目線の高さに動かす
- ③ 作業の際カードを取る前に、
現物に手が伸びる
⇒ 作業課題の棚に目隠し
- ④ フィニッシュボックスに片づけない
⇒ 入れやすいように高さなど調節

また、より作業に集中出来るように、離席など無く、落ち着いて取り組んでいる場面では、ゲーサインなど入れて、「きれいに出来ているね」と軽く声を掛ける等行っている。気になることが抑えきれなくなることはあるものの、そんな時でも概ねスケジュールに乗って活動出来ているのは、今回の支援の成果である。機嫌の悪い時でも、作業を始めると段々集中して、鼻歌など歌いながら楽しそうに取り組むといった場面もよく見られている。

課題として、休憩中や余暇の過ごし方があるが、寮でも運動やおやつ作りなど工夫して取り組んでいる。

(4) 強度行動障害実態調査票の点数の比較

令和2年3月(コンサル前)		令和3年5月現在	
・強度の他害行為 (噛みつき、髪ひき、叩くなど)	3点	・強度の他害行為 (噛みつき、髪ひき、叩くなど)	1点
・激しいこだわり (髪を抜く、紙める、マスクを破くなど)	5点	・激しいこだわり (髪を抜く、紙める、マスクを破くなど)	5点
・激しい器物破損 (家電品など壊す、服を破くなど)	3点	・激しい器物破損 (マスク、服を破くなど)	3点
・他人に恐怖を与える程度の粗暴な行為があり対応が困難	5点		
合計 16点		合計 9点	

こだわりや破壊の場面が減り、落ち着いて活動できる時間が増えてきており、生活寮でも生活の流れにのれるようになってきている。

8. Aさんのこれからの暮らしを考える

(1) 施設以外での生活体験・経験

施設生活が長く、様々な経験が不足しているAさん。この先、どのような生活をどんな場所で送りたいのか、施設以外での生活を体験・経験することで、本人自身が暮らしのイメージを持ち「本人自身で決める」「本人の希望する生活を実現する」ことを目標に、津久井やまゆり園以外の場所で、体験利用することを支援チームで検討した。

(2) ソーシャルストーリーブックの活用

『大人の階段上る計画』というソーシャルストーリーブックを作成することで、Aさん自身が何を目標しているのか、目指すためにどのようなステップが必要なのか、現在はどの位置にいるのか、『見える化』することで本人だけではなく支援者も支援の目的が明確となった。

新たなステップを踏むとき、ステップを踏んだ後など、Aさんと面談の時間を設けてソーシャルストーリーブックを使用しながら、説明と振り返りを行っている。

活動的な生活を送るようになったことで、服装がおしゃれになり、からだもスリムになって容姿自体も変化している。

(3) 本人の気持ちの変化

新しい支援が開始し、しばらくして本人へ感想を伺うと『今の生活のほうがいい!』と返答。新しい支援を導入してから約2週間後にA法人グループホームと生活介護事業所へ10泊11日の体験利用し、『美味しいごはん』『イケメン』『自由

だった』『Aに通いたい』『Aでの生活もよかった、『感動した』『褒められた』と今回の体験利用がとても楽しかった様子が伺えた。その後も5月に移動支援(行動援護)の導入や、7月に支援を整える目的として、C法人障害者支援施設7泊8日の利用を予定していたが、行ない、『そこ(C施設)はもういい』『CよりAがいい』と、体験したことで比較も出来ている様子であった。体験を通して、今後の希望する生活のイメージが広がりつつある。

(4) 体験を通じて見えてきたもの

これまで津久井やまゆり園での生活を希望していたAさんだったが、生活のイメージが広がり「いつAに行けるの?」「Aに通いたい」「施設を早く卒業したい」「一人暮らしをしてAに通いたい」と施設以外での生活を希望するようになった。

(5) Aさんの希望を実現する・暮らしを支える

サポーター

以前は津久井やまゆり園だけでAさんの支援をおこなっていたが、現在は多くの関係機関と協力しながら支援を行なっている。
関係機関:家族、行政、発達障害者支援センター、基幹相談支援センター、県・アドバイザー、津久井やまゆり園、C障害者支援施設、A法人グループホーム・生活介護、外出支援、相談支援など

(6) 現在、そしてこれから

現在のAさんですが、「これからの生活を考えるための経験の増加」と「施設以外の選択肢を知る」場として、グループホームなど津久井やまゆり園以外での体験を行ない、その上で「これからのことについてAさんへ聞き取り」すること、社会のルールを守り、外への楽しみを広げていくために「様々な情報や刺激との程よい付き合い方を見つける」こと、そしてAさんの特性に合わせた支援を行なうことで「心の余裕を持ち、自分の将来を考える」こと、実現したい「夢を膨らませる時期」というように、未来を描くことが出来なかった支援者が、Aさんの支援をここまで進めることが出来た。

2021年10月下旬より、A法人の生活介護事業所へ週5日通所を開始し、本人も「社会人になりました」「社会人だから、頑張ります!」「お金をためて、欲しいものを買うんだ」と話し、大人の階段を

一步一步あゆんでいる。

そしてこの先について、「心に余裕をもって興味関心のあることに関われる生活」「夢への第一歩」、「希望する生活の実現を目指した一歩」「夢を実現させるための生活」を目指し、支援を継続している。

9. まとめ

発達障害者支援センターへコンサルテーションを依頼して約1年。これまでの支援を変えることは簡単なことではなかった。日々の支援に追われ、目の前のことに精一杯で前に踏み出すことができなかったが、『本人の可能性にチャレンジしよう』と強い覚悟をもって支援を変えることを決意した。何度も課題にぶつかりながらも、支援チームで考え解決に向けて検討を重ね進めてきたAさんの支援は、Aさんの言葉からもわかるように約半年という短い期間で大きな変化をもたらすことが出来た。Aさんにとっては、50歳過ぎてから新たな支援を受け、非常に大変なことだったと思われるが、Aさんの頑張りが支援者の気持ちを支えてくれた。

Aさんの支援を通して、支援の輪も広がり、様々な方の協力があったからこそ、Aさんの世界を広げることができ、また支援者としても学び、成長する機会を得られたのだと思っている。「本人の特性に合わせた支援の大切さ」「チームとしての統一した支援の大切さ」を知ることで、Aさんの可能性が大きく広がっている。

支援を通して現場の支援者が感じたことは、『新しいシステムに本人も楽しそう』『支援が楽しいと思うようになった』『これまで何の武器もなく試行錯誤の繰り返しだった。根拠ある支援は統一した支援につながる』『こだわりが減り特性に合わせた支援の重要性を実感出来た』『本人の言葉からも気持ちの変化を感じている』『「見える化」する事で先の見通しが立ち生活しやすそうに感じる』など、前向きな気持ちとなった。

意思決定支援にて「本人の望む生活の実現」を目指すことから始まったAさんの「大人の階段のぼる計画」は、紆余曲折しながらも夢に向かって進んでいる。夢に向かう本人の伴走者として利用者の意思を重んじること、気持ちを察することが出来るよう向き合って支援を積み重ねていくことを継続していきたい。